



名著『イングランドにおけるガーデニングの歴史』を読む 第2回

A History of Gardening in England



竹歳 誠

公益財団法人 都市緑化機構 評議員

第4章 庭園に関する初期の文献

今まで見てきた時代に関連する文献について振り返ると、サクソン時代、およびその後数世紀にわたるハーブと花に関する知識はすべて古典の作家たちが教えてくれたものであった。アプレイウスの『植物誌』*Herbarium* はディオスコリデスとプリニウスの著作を基礎としており、そして主としてアプレイウス（紀元4世紀頃の人物）を通じてこれらの初期の作家たちのことが知られることとなった。この植物誌はアングロサクソン語に翻訳された。もう一つ役に立つアングロサクソン語で書かれた植物のリストは、アルフリックが書いた『文法』*Grammatica* である。ここには当時知られていた普通のハーブのほとんどが網羅されており、対応するラテン語表記も記されている。

イングランドにおけるこのテーマに関する最も初期の作家は教会関係者、すなわち、サイレンセスター大修道院長のアレクサンダー・ネッカムおよびリンカーン司教のグローステストであった。グローステスト [1175 ~ 1253年] は医学に優れ、植物の持つ効能、性質に関する知識を持っていた。農業に関する彼の著作は園芸にかなりの影響を与えたはずである。パラディウスの『農業について』*De Re Rustica* は、多分5世紀というかなり初期に書かれており、それは何世紀にもわたり、農業に関する英語のほぼすべての文献の基礎となり、グローステストのものを含め、この著作の単なる翻訳であったり翻案に過ぎなかったのである。たとえばこの本に書かれた種なしリンゴや種なしサクランボの栽培法などが人々によって受け継がれた。ネッカムはより独創的な作家であり、古典の作家たちから思うがままに引用し、想像上の産物ではあるが「高貴な庭園」はどうあるべきか、について書いた。

メイサーの本は、ハーブ庭園を作ろうとする人なら誰でも、当時イングランドで見つけることができる、そこに書いてある植物をできるだけ多く集めようとしたほど、広く使われたハンドブックであった。庭園に関する追加的な情報はその他の医学書から知ることができる。医師カイマーは、スープに入れて安全に食べることができるハーブのリスト、および果物についての詳細な指示を書いている。このリストには、最も一般的な果物のほか、ダムソン [インシチチアスモモ]、イ

チゴ、イチジク、セイヨウカリン、桃そして外国の果物や香料が掲げられている。

ガーデニングに関して、英語で書かれたこれこそオリジナルなものとして知られる最も初期の著作は、「ジョン・ガードナー」なる人物による論文で、そのユニークな写本がケンブリッジ大学のトリニティカレッジの図書館に現存している。

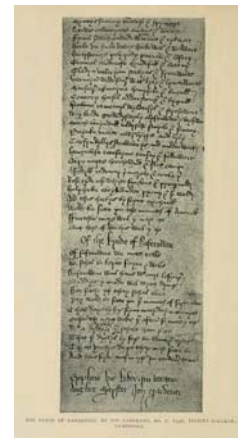


図1 『ガーデニングの偉業』ジョン・ガードナー著
写本 1440年頃
トリニティカレッジ ケンブリッジ

『ガーデニングの偉業』*The Feate of Gardening* の作者については確実なことは何もわかっていない（図1）。彼は専門的な庭師であったかも知れないし、あるいは単にその職業のシンボルとして、ラングランドがピアス・プラウマン [農夫] という名前を書いたのと同じように、そのような名前 [ガードナー、庭師] を名乗ったのかも知れない。ジョンという名は当時の庭師の間で極めてよく見られるクリスチャンネームである。この著作が貴重なのはイングランドの庭園に実際に植えられていた植物やその育て方について議論の余地のない証拠を示しているからである。このほかに唯一入手可能な情報源としては、初期の料理本があり、その中には庭園にふさわしいハーブが列挙されている。ジョン・ガードナーの詩句に出てくる植物のリストはアルファベット順に掲載され、たとえば、Aのところには以下の植物名が記されている。



Adderstong (<i>Ophioglossum</i>)	ハナヤスリ[シダ植物 ハナヤスリ科]
Affodyll (<i>Narcissus Pseudo-narcissus</i>)	ラッパスイセン[ヒガンバナ科]
Auans (<i>Geum urbanum</i>)	セイヨウダイコンソウ[バラ科]
Appyl (<i>Pyrus Malus</i>)	リンゴ[<i>Malus pumila</i> バラ科]
Asche tre (<i>Fraxinus excelsior</i>)	セイヨウトネリコ[モクセイ科]

また、15世紀の料理のレシピ本の冒頭に掲載されているハーブのリストについて、Aのところには以下の植物名が列挙されており、これらはさらにスープ用のハーブ、ソース用のハーブ、サラダ用のハーブなどに分類されている。

Alysaundre (<i>Smyrniolus Olusatrum</i>)	アレクサンダース[セリ科]
Avence	セイヨウダイコンソウ [バラ科]
Astralogia rotunda (<i>Aristolochia</i>)	ウマノズクサの一種 [ウマノズクサ科]
Astralogia longa	ウマノズクサの一種 [ウマノズクサ科]
Atha	[和名未同定]
Arcachaff (<i>Angelica</i> ?)	アンジェリカ? [セイヨウトウキセリ科シシウド属]
Artemesie mogwede	マグワート [オウシュウヨモギキク科]
Annes (<i>Pimpinella Anisum</i>)	アニス [セリ科ミツバグサ属]
Archangel (<i>Lamium album</i>)	オドリコソウ [シソ科]

[詳しくはホームページ参照。植物名の和訳については都市緑化機構 柳野良明専務理事による。なお、植物名に見られる H は小文字のHが重なる時に横線で繋ぐ中世英語の表記法]

第5章 チューダー朝 [1485～1603年] 初期の庭園

15世紀末にかけて、エドワード4世 [在位 1461～83年] の妹とブルゴーニュ公爵との結婚、その同盟を通じたフランドルとの交流の増加により社会生活に様々な変化をもたらされた。バラ戦争の終結に伴う比較的平和な時代により、国内の建築では新しいスタイルが広がり、快適な赤レンガの館が古い城にとって代わった。庭園はもはや要塞化した城壁の中に閉じ込められておく必要はなくなった。

最初のイノベーションの一つが柵で囲われた花壇 the railed bed、すなわち格子状 trellis-work の低い垣根で囲われた花壇であった。ヘンリー8世 [在位 1491～1547年] が1533年、ハンプトンコートの庭園の大改造に取り組んだ時、長方形の形をした花壇が国王の新しい庭園にお目見えした。もう一つの新機軸として、チューダー時代の初期に導入され、すぐにすべての庭園で人目を引く特徴となったのはトピアリー、木や茂みを変った形に刈る技法である。この技法は、イングランドでは目新しかったが、その起源は極めて古く、ローマ人たちには早くから知られていた技法であった。この新しいアイデアはこの国で大人気となり、これらの

木の怪物を作るには大変な時間と手間がかかったものの、2世紀以上にわたりこの趣向は様式として残り続けた。加えてこの時代に大いに発達したもう一つの変ったものは「高台」 mount であった (図2)。13世紀、いくつかの修道院の中には庭園の壁に向かって土の「マウンド」を作り、壁越しに外の世界を見ることができるようにしたものがあったが、チューダー朝時代に至り、「高台」は以前に比べはるかに重要なアクセサリとなった。これは通常、土で作られそこには果樹やその他の木が植えられた。ロッキンガムには実例となる高台が残されている。庭園や果樹園が狩猟場の中にあるような場合には、鹿の一群が壁近くで草を食べる時には、この高台は「雄鹿を撃つこともできる」ポイントとしても有用であった。高台のてっぺんにはあずまやが作られることもよくあった。



図2 高台 ロッキンガム

庭園の外の壁に沿って作られた展望回廊 galleries は、壁と木の柱で形作られた連続するアーチで、その通路はつる植物などで覆われ、隠れ場としてふさわしいものが作られた。通常見られるあずまやは、チャーサーが以前描いたものと今もなお変わらず、芝生の腰掛があって、登攀性植物に覆われた格子垣を備えたものであった。

16世紀の初めに、垣根の手すりが見つぐな花壇とあわせて、新しい花壇が取り入れられ、すなわち「結び目花壇」 knotted bed であり、奇妙で複雑な幾何学模様の形をしていた。1520年までにはこのスタイルは広く使用され、ほとんどのイングリッシュガーデンで何らかの形でこの目新しい結び目花壇の仲間がお披露目されることになった。結び目の中の土は少し盛り上げられ煉瓦やタイルの縁取りでその位置が保たれるようにしてあるか、通路と同じ高さにしてツゲ box、アルメリア [ハマカンザシ] thrift などにより区切るというやり方である。一般的には、この花壇ではその分厚い縁



図3 結び目花壇『庭師のための迷路』より

取りの内側に、装飾的な花や小さい低木が植えられ、いわば「絨毯花壇」 carpet beds のようにレイアウトされた (図 3)。

ただし、時には植物の代わりに様々な色彩の土が敷き詰められることもあった。

以下に列記する花々は、チューダー朝時代の結び目花壇や庭園の境界で栽培されたものである。アカンサス [ヘアザミ] acanthus、ツルボラン asphodel、プリムラ=アウリキュラ [アツバサクラソウ] auricula、アマランス [イヌビユ] amaranthe or "blites" [学名 *Amaranthus blitum*]、バachelorズボタン [花の形がボタン状になる植物の総称] bachelor's buttons、ヤグルマギク cornflowers or "bottles"、カウスリップ [キバナノクリンザクラ] cowslips、ラッパスイセン daffodils、デイジー、「フランス・エニシダ」 French broome、ナデシコ類 3 種 gilliflowers (3 varieties)、タチアオイ hollyhock、アイリス、ジャスミン、ラベンダー、ユリ、スズラン、マリーゴールド [キンセンカ]、スイセン (黄色と白)、サンシキスミレ pansies, or heartsease [RHS では wild pansy または heart's ease]、シャクヤク、ツルニチニチソウ periwinkle、ケシ類、サクラソウ類 primrose、ハナダイコン rocket、バラ、ローズマリー、キンギョソウ snapdragon、ストック [アラセイトウ] stock、ビジョナデシコ sweet william、ニオイアラセイトウ wall flowers、ホオズキ winter-cherry、スミレ、そしてこれらのほか、ミントやマジョラム [マヨラナ] marjoram などの甘い香りのするハーブがある。

ところで宗教改革の時代に至り、[ヘンリー 8 世による] 修道院解散の時点では王国全体にわたり 700 を超える宗教施設が点在していた。しかし、立派な修道院や威厳のある修道分院の庭園はどれ一つ残っていない。それにもかかわらず破壊を免れ、現代の庭園に生き続けているものの中で一番多いものは養魚池である。これらの池は、風景庭園の庭師たちによってさえも、壊すよりは手を加えようということが残されることが多かった。このようにして最初に造られた庭園は消え去ったが、修道院の土地は当時の名門一族へと与えられ、そして以前とはまったく違った性格ではあるが美しい庭園が造られ、昔の大小の修道院があった場所を今美しい景観としているのである。

ハンプトンコートについては、完全なまでの形で会計簿が残されているので、極めて明確な姿というものを浮かび上がらせることができよう。建物用、庭園、狩猟地として確保された土地は 2000 エーカー [約 800ha] に及んだ。新しい果樹園では、梨、ダムソン、セイヨウカリン、サクランボ、リンゴ、キュウリ、メロンが栽培され、イチゴが植えられた。女王にバラを届けるためにフラワーガーデンがあり、キッチンガーデンでは「国王の食卓用のハーブ」が栽培された。ハンプトンコートに関し、ほかのすべての庭園と際立って違っている特徴は「動物」 beasts と真鍮製の「日時計」 dials であり、これらは庭園と果樹園の至る所に置かれていたようである。動物は柵で囲われた花壇に沿って一定間隔で置か

れるとともに、高台の周りと池を一周して置かれた。ヘンリー 8 世の時代にはこの池にはいささか風変わりな方法で水が供給されていたが、それは会計簿に「夜中にテムズ川から水を引いて池を満杯にする労働者に対する」代金が記載されていることからわかる。

次に、果樹園およびキッチンガーデンについて見ると、イチゴは広く栽培され、注意深く育てられた。ラズベリー [ヨーロッパイチゴ] raspberry は今になってもそんなに広く栽培されてきたようには見えないが、グーズベリー [セイヨウスグリ] gooseberry は、この時代になると栽培されていた。新しく加わった果物で一番素晴らしいのはアプリコット [アンズ] apricot で、16 世紀半ば以前に持ち込まれたことは確実である。果樹園に関しては、その他の大きな変化はなかった。梨の種類の中ではウォーデンが、リンゴの間では大きなリンゴのコスタード種が依然として重要な地位を占めていた。桃の改良は進まなかった。

花を育て愉楽のためだけに別に庭園を造って楽しむなどということは大地主だけに許された贅沢であった。王国内の小さな荘園や農家の庭は基本的には実用のためであった。ハーブはその前の世紀のものと同じだったが、それまでにはなかったものとして、アスパラガス、メロン、タラゴン taragon、ホースラディッシュ [セイヨウワサビ]、そしてアーティチョークなどがこの頃王室の庭園で初めて育てられた。一種の大きなエンドウ豆であるランシバル豆 runcival peas が人気の高いごちそうであった。日常生活の中では、庭のために何かを買うということはほとんどなかった。なぜなら毎年毎年、種は貯蔵され、植物は友人の間で分けられ交換されたからだ。古い会計帳簿には庭園に種を蒔くために買われた物の記載はあまり見られない。ただし、こんなにも数多くの立派な新しい庭園を造っていたということは、植物に対する需要を作り出しては違はなく、買われた大量の物は、本職の種苗業者 nurserymen や市場園芸業者 market gardener だけが供給できていたのであろう。果樹が一番多く供給されたのはケント州 **テナム** の果樹園からであった。そこには、フランスからたくさんの接ぎ木、特にピピン種のリンゴの接ぎ木が、またオランダからはサクランボと梨の接ぎ木のいろいろな種類が持って帰られていた。庭の生産物に対して付けられる普通の値段を見つけることは難しい。果物を市場に運ぶことは大変だったため値段は高くなった。取引においていつも公正であるとは言えなかったので、法律が適用され、果樹園数が増加することによりその法的保護が必要になった。サフランは引き続きよく使われそして市場で売るために育てられ、高値で売られた。

庭園の大小にかかわらずその仕事は一人の庭師頭 head-gardener によって監督されていたようである。庭師は庭園に関する物の売買、植え付けの担当をしたが、実際の耕作の手作業は日雇いの労働者によってなされ、常勤のスタッフはしなかった。庭師頭のポストは王室のすべての庭園で極めて重要な地位を占めていた。



庭仕事の道具は最も早い頃から大きくは変わっていない。私たちが今使う鋤やレーキはチューダー朝の時代のものとほとんど同じである。フィッツハーバート Fitzherbert は 1534 年『農業書』*Book of Husbandry* の中で「鋤やレーキはどのように作られるべきか」について一節を割いている(図 4)。

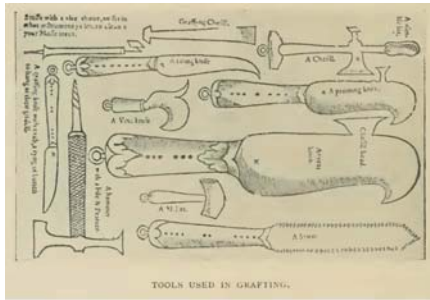


図4 接ぎ木に使われた道具

第 6 章 エリザベス朝のフラワーガーデン

エリザベス女王の治世 [在位 1558 ~ 1603 年] は、イングランドの歴史における黄金の時代であり、数多く天才が輩出し、多くの分野の中でガーデニングの技術ほど、これらの偉大な人々の力から多くの利益を得たものはなかった。ベーコン Francis Bacon が書いた随想「庭園について」*Essay on Gardens* は誰にでも知られている。この時期、大陸のプロテスタント信者は迫害され、その多くの者がイングランドに安全な避難場所を求めた。これらの人々はガーデニングに関する外国のアイデアも一緒に持ち込んできた。エリザベス朝時代の庭園は、イングリッシュガーデンの古いスタイルとフランス、イタリア、オランダから輸入された新しいアイデアが結びあわされたものであった。原始的な中世の庭がチューダー朝初期の愉しむための庭園 *pleasure garden* へと成長し、エリザベス時代のさらに手の込んだ庭園へと進化し、それが「正式の古典的なイングリッシュガーデン」として知られることになるのである。

この時期の庭園は建物との関係を厳格に考えて配置され、建物のデザインを考えた建築家が庭園のデザインも考えた。庭園は建物の単なる付属物とは位置づけられてはおられず、庭園をデザインすることは、建物の計画よりもより一層の技術を要するものと考えられた。「[文明が進化すると] 人間は庭園を繊細に仕上げるより前に、堂々とした建物を建てるようになる—あたかもガーデニングにはより完全性が求められるように」(ベーコン「庭園について」)。幅広い直線の園路は庭園の各部分を繋げ、また庭園と建物を繋げる役割を果たしている。「直線園路」は建物の設計に対応して作られたが、花壇と迷路のパターンは建築の細部との調和が図られた。

庭園の最も基本的な原則は依然として囲われた土地ということで、実際のところ、囲われていない庭園というような考えは、まだ人々の心の中に生まれてこなかった。しかしながら、庭園が高い壁で囲まれていたため、内側の人たち

は壁の外を見てみたいと思うようになり、テラスというものが考え出された。今や我々は、高台の上からの限られた眺めでは満足しないで、壁の向こうの狩猟地と壁の中の庭園を広々と眺めるために、壁の四角形の一辺に沿ってテラスが盛り上げられた、そういう時代に到達したのである。テラスというものは幅広く見栄えのよい形をしており、石の階段が設けられている。そして庭園よりも高く、傾斜した草原の土手、または煉瓦、石の壁により盛り上げられているものである。

園路の両側にある生垣はいろいろな種類の植物から作られている。すなわち、ツゲ、イチイ、イトスギ、セイヨウイボタ、イバラ、果樹、バラ、野バラ、セイヨウネズ *juniper*、ローズマリー、セイヨウシデ *hornbeam*、ミズキ類 *cornel*、“*misereon*”、ピラカンサ *pyracantha* である。園路および小径の多くは「アーチ型天井かアーチ型植物により木陰が作られていた」(図 5)。木陰を作るために使用された植物は、ヤナギ、ライム、セイヨウニレ *wych-elm*、セイヨウシデ、ミズキ類、セイヨウイボタ、白イバラ、サイカモアカエデ *sycamore* の木であった。



図5 ドレイトンのアーチ型枝組みの小径

高台は庭園にとって依然として重要なアクセサリとなっていたが、一般的な庭園の高台では極めて質素な姿のあずまやが乗っているくらいだった(図 6)。そのような高台は *Boscobel* に今も見ることができる。ただ、これにより庭園の中のあまり目立たない場所にあるあずまやの利用をやめる、ということにはならなかった。もしあずまやをセイヨウネズの木で作るならその後 10 年間は何も修理する必要はないが、もしヤナギの棒で作るならその後 3 年ごとに新しく修理しなくてはならない。あずまやに使われた植物としては、バラ、



図6 ボスコベル1894年[右奥に高台に乗るあずまや]

ジャスミン、ローズマリー、ザクロ、ニオイスイカズラ、センニンソウ類 Ladies' Bower などである。



図7 ヘスリントン [剪定されたイチイ]

迷路は、今や多くの庭園で見られるようになったもう一つの特徴であった。剪定された木は普通はイチイの木、という観念は大変広く広まっている(図7)。ヨーク近くのヘスリントンの庭園にある剪定された木すべてがイチイである。しかし、この時代の本を見ると、イチイとは違った別の低木 shrubs のことがより好ましいものとして語られている。ということは、イチイは成長が遅く、たくましい木で、常緑樹であったために、他の低木に比べイチイの方がたくさん生き残ったということのようだ。

パーキンソンは庭園に植えるべき花を「イングランドの花」と「外国の花」との大きく2つに分けている。イングランドの花としては、サクラソウ、デイジー、マリーゴールド [キンセンカ]、ナデシコ類 gilliflowers、スマレ、バラ、セイヨウオダマキなど。一方、外国の花としては、ラッパスイセン Daffodils、バイモ Fritillarias、ヒヤシンス Jacinths、サフランの花、ユリ、アイリス Flowerdeluces、チューリップ、アネモネ、フランスカウスリップ [キバナノクリンザクラ] French cowslips あるいはアツバサクラソウ Bears' Ears などであった。

「外国の」花の数は、わが国の庭園の中で急速に増加しつつあった。旧世界、新世界の両方から輸入されたものうち最もよく知られているものは次のようなものである。「ヨウラクユリ」The Crown Imperial のオレンジと黄色の両方の色、小さなバイモの変種、当時の呼び名では「トルコ Turkie またはギニアの花 Guiniehen flowers すなわち格子縞のラッパスイセン chequered daffodil」。耐寒性の(ヨーロッパ産)シクラメン cyclamen (*europoeum*)；ベニバナサワギキョウ *Lobelia cardinalis*、トケイソウ *Passion flower (Passiflora incarnata)*、別名“Virgin climber”。クリスマスローズ *Christmas rose*、別名 *Helleborus niger, niger angustifolius and vernalis*。普通の白のライラック、別名“pipe tree”、セイヨウバイカウツギ *syringa (Philadelphus coronarius)*；そして普通のコトネアスター [シャリントウ] *cotoneaster* およびラブルナム [キバナフジ] *laburnum*；マルタゴンリリー [カノコユリ的一种] *martagon lilies* のいくつかの品種；普通の黄色のジャスミン；甘い香りのオシロイバナ *marvel*

of Peru、メマツヨイグサ *evening primrose*、そして耐寒性のムラサキツユクサ *spiderworts*；アフリカンマリーゴールド [センジュギク] *African marigold*、ヒマワリ *sunflowers*、チドリソウ *larkspurs* で単年草、多年草の両方；スノーフレーク [スズランスイセン] *snowflakes*、これは「球根性スマレ」*bulbous violets*！としてスノードロップ *snowdrops* の仲間とされたもの、およびランキユラス *Ranunculus*、「イリュリアのキンポウゲ」*the crowfoot of Illyria (R. illyrius)* とハナキンポウゲ(いわゆるランキユラス) *asiaticus*、そしてバachelor's buttons. (*R. plantanifolius flore-pleno and aconitifolius*)、これらは「アルプスの山から」持ってこられた；スイートサルタン [ニオイヤグルマギク] *sweet Sultan, the Centaurea moschata* [スイートサルタンの学名の一つ]、ハクセン *Dictamus Fraxinell*；ハウセンカ *Balsam impatiens*；ベルフラワー [ツリガネソウ] *campanula*、ヒルガオの仲間 *Convolvulus minor (C. bicolor)*。

新しい植物とガーデニングに関する新しいアイデアもまた、プロテスタント難民の流入とともにフランスとオランダから入ってきた。この国に来たユグノー派の人々はほとんどすべての商工業の各分野から来ており、そして特にガーデニングの分野ではこれらの新市民の影響のもと、大きく改善が進んだ。また、「花の展示会」*Florist Feasts* を初めて開催したのもこれらの外国人で、ノリッジはこの展示会で有名であった。

パーキンソンによると、庭園というものは「その真ん中に噴水」を持つべきであり「そこから庭園のあらゆる場所に地下のパイプによって水を運ぶか、あるいは手作業によって大きな水盤か大きなトルコ風甕に移すこと」と述べた。庭園に持ち込まれたほかの水の使い方としては美しい小川の流れとそれを美化する土手、装飾的な橋などがあつた。

以上、エリザベス朝の庭園について、テラス、園路、小径、迷路、高台、あずまや、噴水、小川について一つずつ見てきたところであるが、その全体については、次の2つの文献、すなわち『花の仮面』*The Maske of Flowers* という演劇と、スペンサーが『妖精の女王』*Faerie Queene* の中で「第二の楽園」として描き出している完璧な庭園の詩行の中に、庭園に関するこれらすべての細部が織り込まれている。

■全訳版(仮訳)の公開について

『イングランドにおけるガーデニングの歴史』の全文について、その仮訳を順次、都市緑化機構 HP にて公開中です。併せてご覧ください。

< URL > <https://urbangreen.or.jp/gardeninginengland>

都市緑化技術 編集部

